
かずみ・2200年の未来へ行く

窪まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かずみ・2200年の未来へ行く

【Nコード】

N0757Z

【作者名】

窪まり

【あらすじ】

200年後の未来から、ある日突然、時空の裂け目から、全裸の女性がアパートの窓から入ってきた。女性にしか興味がない、20歳の、かずみは、なぜ？突然、全裸の美少女が入って来たのか理解できなかった。彼女の正体は、200年後の未来から来たアンドロイドであった。5年間の女同士の同棲をしたが、突然別れることになり、200年後の未来で彼女と再会したために、自分の肉体を冷凍保存するために風俗嬢として働くことを決意した。だが現実 is 厳しい。いろんなお客を相手にしなければならない。なお、性風

俗の世界を想像で描いたものですから、リアリティは少ないかも知れませんが。

かずみが、なぜ性風俗嬢になった理由（前書き）

ある日、突然、全裸の美少女が、主人公かずみの部屋に入ってきた。
5年間の同棲生活にピリオドを打ち、本気でアンドロイド199J
pを愛してしまった。

200年後の未来に行くため自分の肉体を冷凍保存しようと考え、
性風俗の世界に入った。

かずみが、なぜ性風俗嬢になった理由

かずみは、2000年後の未来から来た美少女アンドロイドと恋に陥いり、5年間も毎日のように女同士の肉体関係をもっていた。

だが、突然の別れに消沈してしまった。

美少女アンドロイド1999jpは、謎の時空の歪みから2000年後の未来からタイムトラベルして来たのである。

2000年後の未来の科学でも不可解な現象である。そして、約5年間、かずみと1999jpというアンドロイドは女どうしの恋愛を同棲しまったのである。

1999jpは、見た目は普通の少女と区別つかない。かずみのアパートに5年間居候していた。女同士で肉体関係を持ってしまったのである。

その5年間の思い出が詰まったアパートからでることになった。それは甘づっぱい思い出がみちているから、一人で、その部屋にいと、孤独感を感じる。とても切ない気持ちになるからである。

インターネットで、「自分の肉体を冷凍保存し、未来へ旅立つ」という記事を見つけ、2000年後の未来へ行くことを決心した。

だが、自分の肉体を冷凍保存するには、数千万円もかかる。どうすれば、2000年後の未来へ行けるか考えた末、最もてっとり早いのが、風俗嬢になることである。

だが、かずみは男性がとても苦手である。ましてSM嬢の女王様になるしても、男性の裸を見るだけでも抵抗がある。その上、いじめられて興奮するのを見ただけで吐き気をもよおす。

かずみ25歳。20歳のとき200年後の未来から来た美少女アンドロイドに恋してしまい、初めは一緒にお風呂に入り、同じベットの中で一緒に寝て、それがエスカレートして、あらゆるレズ行為をする仲になった。

女性が女性を求める風俗店はないだろうか考えた。インターネットで検索したが、なかなか良い店がない。私に相応しいビアン専門のお店はないだろうか？

かずみは独り言を言った。

「やはりオンナ同士が、一番気持ちいいわ。特に若い子だと肌がツルツルして肌と肌が接触するとき気持ちいいの。どう考えてもオンナ同士でエッチなことをするのが私にとって一番相応しいわ」とつぶやいた。

かずみのビアン風俗嬢レビューとなるが・・・。

かずみは中学二年生の時、もう少しのところでレイプされそうになったため、男性を嫌悪するようになった。学校の裏で、ガラが悪そうな不良男子生徒に襲われ、悲鳴を上げた。危うくレイプされそうなところ、他の女子生徒たちが通報してくれた。そのなかで先輩の美しい女子中学生がいた。髪の毛が長く、とてもきれいだった。その美少女の先輩は、かずみに優しく声をかけた。「大丈夫？」膝や太もみにアザができ、軽い擦り傷があるので、その先輩の女子中学生は、かずみを優しく介抱してくれた。

『なんときれいな女性なんだろう』と思った。それ以来、女性に対して性的な感心をもつようになった。

それ以来、かずみにとって彼女は憧れの対象になった。それ以来、その経験によつて、男性は怖くつてしかたないと感じた。どんなにおとなしそうでも、やさしそうでも男は、人の目がいないところではオオカミになると思ったからである。その事件以降、かずみは異性に全然興味がなくなつた。いや、男性を強く嫌悪するようになった。そして女子高に通うようになり、百合の世界に目覚めてしまった。

女子高での生活はバラ色だった。そして女子短大に入学し、いろんな女の子とつきあうようになった。オナナ同士の楽しい思い出ばかりであった。卒業後、親元を離れ、アパートを借りて生活したときに、突然の閃光、自分の部屋が歪んだように見えた時、窓から全裸

の美少女が入ってきた。

かずみは、あまりにも美しい身体を見て、それは芸術的な美しさだったので感動してしまった。

「これは夢なの？とてもリアル！」だが現実だった。

タオルを持ってきて、その全裸の美少女と話し合った。

「あなたは、どこから来たの？わたしの名前は、かずみ。あなたは？」

その全裸の美少女は、しばらく黙っていた。

『わたし夢を見ているのだわ。これは夢。こんなSFチックなことなどありえない。もしあったら逆に気持ち悪い・・・』と考えた。

全裸の美少女の肩にタオルを置き、話し合った。

そして食事をすすめたが、その全裸の美少女は何も食べようとしなかった。

かずみは、彼女がアンドロイドであることに気づくまで時間がかかった。

なにか着るモノを探して、下着とパジャマを用意した。だが下着の着かたを知らないアンドロイド199Jpは、それが何なのか理解できなかった。

かずみは、もう一度訪ねた。「あなたの名前は？どうして全裸でここに来たの？」

かずみは足の裏をみた。199Jpという刻印があり、「かわった入れ墨ね。」その時、アンドロイド199Jpは初めて答えた。

「それは私の製造ナンバーです。わたしの体内にあるナノチップにはもっと詳しい製造情報が入力されています」

かずみは何のことなのか理解できなかった。まだ普通の人間だと思い、まさかアンドロイドとは思わなかった。

かずみは先に夕食を食べたが、アンドロイド199Jpは、いつまでもトイレに行かないし、差し出した飲み物や食べ物に手を出さなかった。

そしてアンドロイド199Jpは突然、無機質な言い方で言った。
「私の残り稼働時間は、20075日」

かずみは「???」と思った。

そして、アンドロイド199Jpにお風呂入らないかと言った。

「お風呂とは何ですか？」

「え？何なのこの質問は？」と、かずみは啞然した。

「お風呂とは、身体を洗うところなの」

「では、外部の汚れを落とす作業ですか」

「そうだけど」

「あんだ。全裸で私の部屋に突然は行ってくるし、いったい何なの？」

その時、かずみは二人でお風呂に入ることを考えた。

お風呂に入ると、二人は全裸であり、そして、身体を見たら、体毛が全く無い。

「あの娘、全身、完全脱毛なんだわ。徹底しているわ」そして足の付け根、すなわち下腹部を見て驚いたのは、肛門と女性性器が無いことに気がついた。

『もしかして、彼女はアンドロイドなの？信じられない！今の科学では作れないはず』

かずみはアンドロイドだと初めて認識した。

かずみは質問した「あなたの製造年月日はいつなの？」

「わたしの製造年月日は西暦2197年9月3日午後7時35分で

す」と答えた。

「え！今は西暦2006年12月なんだけど・・・。」

ふたりでシャワーを浴びたときアンドロイド199Jpは言った「私を洗うとき、なぜ水温40・5度の温水をかけるのですか？」

「それは、温かいほうが良いに決まってるからじゃない。冷たい水で洗うと風邪ひくし」

「では、この水の集まりは何ですか？」

「お風呂に決まっているじゃないの」と答え

「『お風呂』とは何ですか？」と質問した。

「お風呂とは、人間の身体を温めるためにあるもの」

「一緒に入ってみない」といって、アンドロイド199Jpをお風呂の入り方を教えながら入れた。

二人が入ると、お風呂のお湯がたくさん出て行った。

かずみとアンドロイド199Jpは、お風呂の中で、抱き合った。

「とても気持ちいい。彼女の肌がすべすべして、弾力があって、私の身体そのものがとろけそう・・・。」

「こんな気持ちいい思いをするなら今すぐ死んでもかまわない」と強く感動した。

それが、かずみとアンドロイド199Jpとの初めての出会いだった。

だが、その5年後、時空の裂け目ができた時、200年後の未来に戻らなければならなと思い、アンドロイド199Jpは、かずみの元から去ってしまった。別れのときが訪れたショックが強すぎて、かずみは職場を無断で休むようになった。

そして、ネットで自分の身体を冷凍保存して未来で再生してくれる記事を読み、いちかばちかで200年後の未来へ旅たというと本気で思った。

厳しい性風俗界の現実 暇で長い休日

かずみは25歳で性風俗デビューした。年齢的には遅いデビューである。

かずみは今後の生活を考えた結果、OLの仕事をしながら、風俗の仕事隠れてすることにした。

土曜・日曜日が、かずみの風俗出勤日である。

ビアンを相手にするデリヘルであり、お客の指名があれ、お店の自動車でラブホテルまで送るのである。ボーイツシュな顔をしているので、ときどき、おとなしくかわいらしい十代後半の少年と間違えられることが良くある。もっと幼い顔だったなら、シヨタ向けの外見になったかも知れない。

かずみはネットでビアン系性風俗店の募集を探し続けた。

ビアン系の性風俗店は意外と少なく、最近の性風俗店にとって大きなライバルは出会い系サイトである。

高いお金を出して性欲を発散するよりも、出会い系サイトでセックスフレンドを作るほうが手っ取り早いからである。

だから高いお金に見合ったサービスをしなければ、リピーターがつかない。指名されないから稼げないのである。いまだ正社員のOLでも、まだ20代では一ヶ月で給料を使いきってしまうから、とても短期間で数千万円ものお金を貯めるなんてできるわけがない。

また、今どきOL（それも正社員）という美味しい職業を辞める訳

にはいかない。

イメクラなら、残業を断れば、毎日、出勤できるが、相手は男性だから、かずみにとっては気が遠くなるような仕事である。とても男性を相手にする気にはなれない。

イメクラは、ターミナル駅がある場所ならどこにでもあるが、ピアン系風俗店はほとんどないから、えり好みできないのである。

性風俗デビュー初日の土曜日の午前10時半にお店で待機した。

待機中は、狭いお店の中で他の風俗嬢と会話したり、テレビを観て時間をつぶす。

性風俗初日、かずみを指名するお客は誰もいなかった。

かずみは容姿がよくスタイルもいい。今日はなぜかお客さんの指命が来なかった。ギャラはもらえず、待機料だけ、ほんの数千円だけしかもらえなかった。

悔しくなって、一人でバーに行き、お酒を飲んだ時、若いお兄さんから声をかけられたので無視したが、何度も声をかけるので、ほとんどお酒を飲まず、急いで料金を出して出て行った。

若いお兄さんは、おとなしい優しそうな男性だったが、かずみは男は大嫌いであった。

途中、コンビニでお酒と、つまみを買い、テレビをつけピアン系のDVDを観た。

ピアン系の女優二人がが裸でエッチなことをしている。そのDVDは某大手の通販サイトから購入したモノである。

出勤初日は、ボーイッシュな、かずみにとって似に合うショートパン

ツにタンクトップである。季節的には肌寒い。この服装は肌を露出し過ぎ。

男もののYシャツを着て、ビアン系DVDを観ていると性的に興奮してしまい無意識に、手がショーツの中に入り、オニーをしてしまった。アルコールが入っているから自制できない。

気がついた時には深夜2時になっており、日曜日の朝もお店に出勤しなければならぬと思い、シャワーを浴び、そのまま裸でベツトの中に入って寝た。

日曜日にお店に出勤した午前10時半、今日こそは指命されたいと思った。

狭いお店で、他の風俗嬢が次から次へと指名され、外出したが、かずみはいつまでたっても、指命されず、半分苛立ちを感じた。

かずみは、つぶやいた「わたし胸が小さすぎるから指命がないのかも。胸の大きさは女の魅力だから」

夜7時、やっと、かずみに指命された。

それは既婚の40代の女性だった。一緒にデートするだけのお客だった。

「やっと、指命されたわ。よし、頑張るぞ」と行き込んでいた。

その40代の女性は、ふくよかでウエストが太く、そして年齢よりも老けていて、自分の母親みたいな女性だった。そのお客を観た時、かずみは性的に萎えてしまった。でも、デートだけだから、ちよつと買物をしたり、一緒にお酒を飲むだけで十分だから、まさか肉体関係はないだろうと思った。

「このお客さん60分だけのデートコースだから、適当に一緒にいればいいだろう」と思ったら、人気がないところで、かずみの露出した太もを突然、揉み出した。かずみは、いかにもボーイッシュな雰囲気だからいつもショートパンツを履いている。

「いきなり、太もを揉むなんて大胆なお客さんですね」と苦笑いしながら言つと、

「あんたを指名したのは、まるで少年みたいな顔だから。もともと私は女性に興味がないから」といつて次は、強引に口づけをされた。かずみの無い胸を見ていつた「胸がほとんどないから、まるで、かわいらしい男の子みたいだから」と言われ、カチンと来た。その「男の子みたい」という言葉が気に入らなかった。

それから、かずみは髪の毛を伸ばし、できるだけフェミニンな女性になろうと決心した。

かずみはお店に帰った時、同僚の風俗嬢に今日のことを愚痴ったが、大声で笑われた。

結局、指名したお客は、40代のふくよかな女性一人だけだった。当然、歩合制であるから、お客一人、それもホテルには行かないデパートコースだから、今日の、かずみの日当も安かった。

悔しくてしかたなく、そのままバーに行き、お酒を飲み、酔いつぶれてタクシーを使って自分のアパートに帰った。

さらに厳しい性風俗界 真性サドや性格が悪いお客さん

かずみはビアン系性風俗の仕事は快樂と実益を兼ねたモノだと思っただが現実には、そう甘くない。

かずみが土曜・日曜に勤める性風俗店では、風俗嬢の入れ替わりが早い。

なかなかお客さんからの指名が来ない、かずみはなぜ、お店の風俗嬢がすぐに辞めてしまうか、一ヶ月以内に理解できた。

ほとんどが、性格が悪いお客か、女性を虐めることに快感を感じるお客ばかりである。

不特定多数の女性とエッチなことをして、気持ちいい思いをして、短期間で数千万円も稼ぐなど、現実には甘くない。

かずみの場合は、ほとんど60分とか120分のデートコースであるから、ただ一緒にいてお客さんの愚痴をうなずくだけでよかった。ほとんど女性同士の肉体関係がないから、あまり稼げないのである。

で、この業界になれ始めた時、かずみを指名するお客さんがあらわれた。

いかにも、上品なお嬢さんで、表情がやさしそうだった。言葉使いも丁寧である。

かずみは、ついに女同士でエッチなことができると思った。かずみの頭の中で様々な妄想が懸け巡り、考えているうちに、ムラムラしてきてオニーをしたくなったが、楽しみは後だと自分に言い聞かせた。

お店の自動車で、あるラブホテルに送られた時、かずみはホテルに初めてのお客さんがいる部屋のドアをノックした。

だが、お店に来た時とは真逆な態度。言葉使いが悪く、かずみの無い胸を見て「少年みたい」と言った。その言葉にカチンと来て、言い返したい気持ちを我慢して、ニコニコしながら、対応した。

「お客さん。どのようなプレイがお望みですか」

「お前、まるで男みたいだな」

ボーイッシュなかずみは、その言葉をきいて、いまにも爆発しそうだった。

「おい。服を脱がせろ。この変態」

お客は、ドレッシーなワンピースであり、背中のチャックを引き下ろそうとした時、

「何やっているのだよ！このうすらバカ！お前、やる気あるのか」とキツイ口調で言った。

「わたしの服は、お前が着る安物の服ではない。丁寧にため！」と言われた。

かずみはストレスが最高状態になり、そのお客を殴りたくなった。だが、相手はやっと自分と肉体関係を持つことができる初めてのお客だった。

そのお客は、一度限りのお客であり、この地獄のような時間を過ぎ去れば、そのお客とは永遠に会うことはない。

いかにも上品なお嬢様で、大人しそうで優しい女性は、お店に来た時とは別人のようであった。

かずみも服を脱ぐと「何なんだよ。この安物の下着。ちゃんとした女なら、人に見られても恥ずかしくない下着を着ろよ」と乱暴な言葉が返ってきた。

かずみは、もう我慢できなくなり、お店に電話しようかと迷った。あまりにも態度が横柄であるからである。

そして、かずみにショッキングなことを言った。全裸になった二人は、かずみの顎を触り、そして乱暴な口調で言い聞かせた。

「ねえ、わたしオンナを虐めるのが好きなの。マゾ女性が快感でもだえるよりも、マゾではない女性が苦痛に満ちた表情を見るのが好きなの」

かずみは、限界に達した「お客さん、このお店はSMクラブではありません！ 私にも人権というモノがあります。あくまでも仕事ですから」と言ったら、そのお客は逆キレしてしまった。

かずみは、これは不味いとおもって、すぐ、どけ座して謝った。とても悔しい気持ちを感じた。

「お客さん、申し訳ございません。以後、気おつけますから」

そのお客は、かずみが謝ったことによって、自分が上位にいると思いい、そして持参した道具をだした。

「ねえ、これが何だか解る」

かずみの頬に、SMに使う鞭で撫でた。

かずみは、丁寧と言った「お客様、それはサービス外です。申し訳ございませんが、そのようなプレイはできません」と注意した。

そのお客は言った「何言っているの！わたしに反抗する気！」

「では、シャワールームでお背中お流しいたしましょうか。」と言
ってバスルームに行った。

かずみは、マゾではないから、そのお客の行為は苦痛でしかたなか
った。かずみは真性レスだが、マゾではない。

バスルームに行く途中、あまりにも酷い態度のため、かずみは泣き
たい気持ちを抑えながらバスルームに行った。

全裸になった二人は、シャワーを浴びた。

そして、お客さんの背中を恐れ恐れ、ボディソープを使いながら洗
った。

「ねえ。やる気あるの。あんた」と言われた。
かずみは、かずみなりに一生懸命やっている。

「さぞかし性風俗嬢はお金が稼げて良い身分」だと皮肉を言われ、
そして「あんた。それでも性風風俗嬢なの。こんな洗い方では身体
の汚れが落ちないわよ。」そしてさらに「あんた、まともにお風呂
入ってないの」とバカにした言い方をした。

そして、怒りを通り越し悲しい気持ちになり、お客さんが見えない
ところで涙をながした。

そして、お客さんの身体を洗い流した後、かずみも身体を洗った。

女性二人が、全裸でいて、かずみに壁に手をつくように命じた。

お客「ねえ。これから私のいうことに服従しなさい。両手を壁につけて、背中とお尻を差し出さない」と命じられ、いきなり強い鞭が、かずみの身体に当たった。強烈な痛みが走った。

かずみは、我慢できなくなり、そのお客に言った。

「お客さん、わたしはSM嬢ではなく、ビアン相手にサービスをする性風俗嬢です。いくらなんでも、この扱いは、不正行為です！ただちにプレイを中止します」と強い口調で言った。

そして、ラブホテルの部屋にある電話機に手をかけた時、お客は、ヘラヘラした口調で言った。

「ちょっとやり過ぎだったわ。お店に電話しないでほしいけわ。今までのことは、謝るから、わたしを抱いて欲しいの」と言い始めて、かずみは電話の受話器を元の位置に戻した。

かずみは、お客さんを抱いた。全裸の女性が二人で抱き合う。

かずみは言った「ねえ。口づけしましょう」と言っで、かずみとお客は口づけをした。

そして、時間までプレイが行われた。

お客の性欲が満足に達した時、そのお客は別人のような、お店に来た時のような優しい女性となった。

「今日は、とても楽しかったわ。で、名刺とか無いの？」とお客は訪ねたが、

かずみは「申し訳ございません。名刺が切れていて、今ないのです」

と嘘を言った。

本当は、今日のお客が初めてであり、名刺は有り余るほどあるが、もう二度とあのお客を相手にしたくなかった。

かずみは考えた「こんなお客ばかりだと、いくら女性との肉体関係が好きでも、嫌になるわ。だから、辞める風俗嬢の娘がいるのだから」と思った。そして、次はお客に舐められないように、不快に感じるお客が来たら、すぐにプレイを中止しようと思った。

優しそうなイケメンを振ったかずみ

月曜日の朝、頭痛がした。日曜日のお客の態度が悪く、ストレスとなり、帰りには閉店までバーでお酒を飲み、酔っ払って他の知らないお客に、風俗での愚痴を言っていた。

帰り、午前2時、タクシーを呼んで、かずみが住むアパートに行った。日曜日の稼ぎは、タクシー代とバーの酒代で消えてしまった。

午前3時、ばったり私服のままベットに横になってそのまま寝てしまった。

午前6時半、目が覚めたとき、頭が痛い。会社を休もうと思ったが、今日は月曜日。

月曜日に突然休むわけにはいかない。いや、休みにくい雰囲気である。

洋服と下着を着替え、いかにもOLらしい服装をした。ミニスカートの黒のストッキングを履いて、必死な思いで出社した。「今日が月曜日でなければ、休めるけど、突然、月曜やすむと上司に変な目でみられる」とつぶやいた。

頭痛がするから仕事はかどらない。早く退社時間がくるのを待っていたが、やっと正午になり、近くのレストランに女性の同僚と一緒に食事をしに言った。ほとんどの会話は、韓流ドラマなどの話題があるが、かずみはあまりテレビを観ていないので、内容が良くわからず、ただ、適当にうなずいていた。そもそも、かずみはテレビを観るとしたら、ビアン系のDVDしか観ていないのである。または、かわいらしい10代のマイナーなグラビアアイドルのDVD

を観て、性的に興奮するくらいだから、とてもではないが、みんなの話にあわせられない。それは、韓流ドラマを見る時間がない。ほとんどがビアン系やグラビアアイドルのDVDを観て性的興奮したら才 ニーするからである。

そしてレストランから帰った時、優しそうなイケメンの男性からつきあって欲しいと言われた。

他の女性なら二つ返事でおつきあいするが、かずみは男が大嫌いである。先日でも、優しそうな女性だと思いい、女性同士の楽しい肉体関係を体験できると期待したが、そのお客の本心は、若い女性を虐めることに快感を感じる鬼畜な女性だったから、たぶん、この優しそうなイケメンの男性社員も、絶対に影では鬼畜であり、つきあったら何をされるかわかったものではないと思って、冷たい口調で、おつきあいを断った。

午後の休憩時間、そのことを他の同僚に話したら、「あんた1000年に一度のチャンス逃したじゃないの！バカじゃない」と言われたが、かずみにはかずみなりの価値観があり、みためがどんなにおとなしく優しそうでも、プライベートでは鬼畜趣味だと思い、もし、つきあったら場合によっては命の保証はないと思った。

たしかに、かずみの顔は、かわいらしい少年のような顔で、細い身体であり、スタイルも良い。だからレオタードや競泳水着が似合うのである。

かずみは思った、「あのような大人しそうで優しそうな男性ほど、実は鬼畜。真性サディストだから、つきあったらミニスカートのメイド服を着るように強要され、その恰好のまま、ひとりで満員電車

に乗るように命じられ、ご褒美と賞して、むち打ち100回くらわられるわ」さらに「みんなが見ている前で、お漏らしを命じられるかも知れない」と勝手に過激な妄想をしていた。退社時間のとき、外は突然の雨が降って来た。

かずみが冷たい口調で振った、イケメンの男性が、話かけてきた「傘を貸しましょうか？僕はもう一つおき傘があるから」と親切心で言ったら、かずみはキツイ口調で「あんたみたいな、へなへなした男性の傘を借りるくらいなら、雨でずぶ濡れになったほうがマシだわ」と言っ、雨が降る都会の中に去った。

かずみの母親の悩み かずみの心の傷

かずみは、もしあのイケメンの傘を借りたら、それこそ隙をつくることになる。それを切っ掛けに、しつこく交際することを求められるから、傘を借りなかった。入社して傘をささず、雨の中を歩いた。12月の雨は寒い。

次の日、風邪を引いてしまったため会社を休んでしまった。体温が38度ある。

日曜日にバーが閉店するまでお酒を飲みつけ、タクシーで帰って、かずみが住むアパートについた時には深夜3時だった。寝不足と二日酔いの二重苦で出社し、夕方には雨が降ったが傘を差さずに自宅に帰った。ずぶ濡れだった。

当然、風邪を引くわけである。

かずみは母親に電話した。母親が「もうそろそろ結婚のことを考えなさい」と言ったら、かずみは絶対に結婚したくないと反論した。かずみの母親は、おかゆを作り、それを食べさせた。そして、かずみは何故、結婚したくないのか、何故、男性が嫌いなのか話した。「わたしが中学二年生のとき、不良少年から強姦未遂されたこと覚えていて」と母親に話した。かずみの母親は、かずみの心の傷が癒えていないことを悟った。むしろ、それが切っ掛けで男が嫌いになり、異性に興味を失い、同性のみに興味を持ったことを知っている。

かずみの母親は「ごめんなさい。あなたの心の傷がまだ、癒されていないことを知らなかった」と言った。「あのときは、とてもつらかったのね。変なことを思い出させて、ごめんなさい」と、かずみの母親は言った。

それ以来、かずみの母親は、結婚しなさいと変なプレッシャーをかけることをしなくなった。

かずみの母親が部屋から出て行った時、美少女アイドルの写真集を眺めながら身体を休めた。

「なぜ日本では同性同士の結婚が認められないのだろうか？」と天井をみて考えた。

「でも、わたし女に生まれて良かった。高校時代も大学時代も、オンナ同士で、隠れてエッチなことをしたし、一緒にお風呂入って、同じ布団の中でお互い全裸で寝て……。そして……。」とさまざまな思い出が蘇った。決定打になったのが、5年前にアンドロイド1999Jpとの出会いであり、5年間の同棲生活だった。

学生時代では、社会人の時と比較すれば、時間があり、アンドロイド1999Jpと、さまざまなエッチな行為をしたけど、生身の女性と違って、理想的な体型、本物の若い少女みたいな肌、触った時の身体の弾力性など、もう理想以上の気持ちよさ。たぶん、未来から来た理想のダッチワイフだったのではないかと。あまりにも完璧な女性として作ったアンドロイド1999Jpは、中毒性があつた。

「未来の人は良いな。あんな理想的な女性をモデルにしたアンドロイドと、好きなだけエッチなことができるから。わたしも早く20年後の未来に生きたいわ」と独り言を言った。

で、風邪が治りかけてきた時、レプシーンがあるアダルト動画サイトをみたら、はきげをもよした。

まして、女性が男性の象徴に口を入れられるシーンをみると、急いでトイレに行って、吐いた。

そして、中学二年生のときのトラウマが蘇り、男がますます嫌いになった。

レプシーンがある動画をみると、自分が腹を殴られたり、頬を思い切り叩かれ、太ももに膝蹴りを受けた時、強烈な痛みで悲鳴をあげた。とても怖い体験だった。そのため体中に傷ができた。かずみは、その時、レプされて殺されるのではないかと思った。そのトラウマを思い出させるのが、インターネットのアダルト動画サイトであった。

「男なんて大嫌い」かずみはつぶやいた。

かずみの有給休暇 競泳水着で

かずみはスマートな体型をしており、競泳水着やスクール水着、そしてレオタードが似合うのである。

風邪を引いて、年休をとって3日目、風邪も治りかけた時に、自分の体型を確認した。鏡で自分の体型を見るとき、競泳水着やレオタードを着て鏡に映して、体型が崩れていないか確認する。かずみは、自分の体型を、ものすごく気にするので、あまり食事を食べない。少食である。

ただし、かずみがコンプレックスを感じるのは、顔が少年みたいであり、胸がほとんどないことである。

性風俗は第一印象が勝負だから、少しでもフェミニンな雰囲気を出したいと思うが、髪の毛を肩まで伸ばしたときの自分の写真を、スマートフォンソフトで、みると似合わない。男装すれば、かわいらしい男の子と良く間違えられるから、なるべく女らしい服装するのである。だから、普段着はショートパンツかミニスカートしかない。

だが、時々、女装が上手な「男の娘」だと思われるから、秋葉原やコミケには行かない。

かずみはウエストが、かなり細い。くくびれがあるから、それをアピールすることによって、自分は女性だということを印象つけるの

である。だから身体のラインが目立つ競泳水着しか着ないのである。かずみは自分は男性脳ではないかと思うことは、若い女性の水着姿をみるとムラムラするからである。

スリムな体型だからビキニよりも、競泳水着が似合う。夏になれば必ず競泳水着を着て海で泳ぐ。かずみの友達は、例外なくビキニであるが、かずみだけは競泳水着である。

だから、かずみはビキニの水着は持っていないが競泳水着なら何着でも持っている。

競泳水着だと、身体を少し締め付けられたような感じがするので、抱かれたときを思い出すからである。ビキニの水着にない気持ちよさがあるからである。

「だって、私がパンツ（長ズボン）を履く姿を見ると、まるで男の子みたい。髪の毛を伸ばしてもロン毛の男子だと思われるし。問題は顔なんだわ」と、つぶやいた。

だから、間違えられないように、女性的な服装をする。その結果が、上はノースリーブのブラウスカタンクトップ。下半身はショートパンツやホットパンツ、そしてマイクロミニスカートになってしまう。寒いときは、タンクトップの上にジャンパーをはおり、膝まであるロングブーツを履くのである。そしてさまざまな女性らしい飾り付けをして、自分が女性だということをアピールするのである。

それに脚全体を出した方が、動きやすいし脚が長くみえるからであ

る。

いかにも動きやすい恰好をするから、ボーイッシュさを強調させてしまっている。

暇な待機時間 かずみ、かわいらしい女の子に

かずみの身長は170センチで女性では背が高い。

顔は少年みたいで胸がほとんど無い。そして背が高いというコンプレックスを持っている。

「わたしって、人が思っているほど活発でもないし、むしろ内気。ただ女の子だけには積極的なだけ。キャリアウーマンでもないし、仕事もたいしてできない」と、つぶやくほど自分に自信が無い。通勤のときには女性専用電車に必ず乗るが、パンツ（長ズボン）はいて通勤をすると男性と間違えられるので、ほとんどミニスカートに黒のストッキングを履いて出勤してくる。時々、パンツを履いて通勤をすると、かわいらしい少年が間違って女性専用車両に乗ってしまったと勘違いされることもあるが、かずみにとって女性専用車両はとてもありがたい。

むしろ始発から終電まで、土日・祝日でも女性専用車両を運転して欲しいと思っている。

土曜日の朝、かずみはいつもの癖で女性専用車両に乗ったら、男性もいて驚いたが、土曜日は女性専用車両でも男性が乗ることができるのである。そのままピアノ系デリヘルのお店に向かった。

朝10時半に店長に挨拶をして、次から次へとピアノ系風俗嬢が出勤してきた。

そして11時から営業が始まり、何人かの風俗嬢がラブホテルへと行った。店長も、ピアノ系風俗嬢を自動車で送り出すとき、かずみ

と内気そうな風俗嬢の二人だけになった。もう一人の風俗嬢は身長が少し低く、かわいらしい女の子であった。

かずみと同じマイクロミニスカートにタンクトップという服装をしており、かずみは、その子を見ると抱きたくなる衝動に駆られた。お店には予約のお客がしばらく来ないようなので、かずみはそのかわいらしい女の子の太ももを触った。「いやっ！」と小さな声がした。かずみは、その声がかわいらしいので、我慢できず抱きしめた。「抱き心地が良い子」と思った。そしてスカートの中に手を入れた。

そのとき店長が来て、げんな表情をした。

店長は何も無かったように、かずみに注意をしなかった。

店長は、30代後半から40代くらいの眼鏡をかけた女性である。他のビアン系風俗嬢には厳しく指導することがあるが、かずみにはほとんど注意しない。かずみに対して何も期待しないのか、背が高く男っぽい顔をしているから注意しにくいのかの、どちらかである。だから、待機中は何のストレスもない。

かずみはOLの仕事や友達（同僚）関係では、とても消極的だが、ビアン関係ではとても積極的だった。そのアンバランスさが、かずに強いコンプレックスを抱かせた。「何の承諾なしに、隣の風俗嬢の女の子にいきなり抱きつくなんて、わたしまるで獣みたいだわ」と、店長に叱られるよりも、気が落ち込んだ。

S Mプレイが終わった後、慰めに

かずみが一人でビアン系風俗店に待機中、かずみにお客さんからの指命があった。

それは、カップルからの指名である。

かずみはきっぱり断った。

だが店長は、丁寧な言葉で言った。「かずみちゃん。もし、嫌なことがあったらいつでも、このお店に電話してちょうだい。かずみちゃんだけが指名が少なすぎるし、新たな体験だと思って、頑張つて行つてらっしゃい」と優しい口調でいわれると断りにくいのである。

かずみは中学二年のときにレイプされそうになった嫌な思い出があり、それ以来、男性が大嫌いになった。まして、カップルの男性の前で、裸でレスプレイをするなんて、恥ずかしくてできない。かずみにとって、とても嫌な仕事だった。

店長と一緒に、某ラブホテルへ自動車で送ってもらい、お客さんがいる部屋まで案内された。

その時、出てきたのは、男性用競泳水着（ブーメラン・三角状）を履いた男性であった。

見てはきげをもよおした。目をそむけながら男性のお客と話した。

かずみにとって男性の裸を見ると気持ちわるくなるのである。

部屋に入ると、ボロボロになったミニスカートのメイド服を着た若い女性がいた。

痛々しいく感じた。お店に電話して、今日の指名を断ろうかと思っただ、店長は今、自動車でお店に向かっている最中。店長の携帯電話の番号が解らない。

カップルの男性は、とても紳士的で言葉使いが良く、性格が良さそうだが、かずみは、その男性に強い嫌悪感を感じた。

うすくらい部屋の中でも、鞭で打たれた傷が見えるほどであり、メイド服は背中を中心に破れていた。そしてSMプレイの縄が部屋の中で散らかっていた。

男性は「彼女を君の肌で慰めて欲しいだ」と言った。

で男性は、「最後の仕上げを」と言って、かずみに、その女性を羽交い締めするように指示した。

かずみは、女性を羽交い締めしたとき、男性は、その女性の腹にパンチを入れた。

「ボッスッ」という音がして、女性から「痛い！」と小さな声が聞こえ、立つ力を失い、かずみが羽交い締めした腕を振り切って自分の腹を、押さえようとしたとき「しっかり立たせろ！力一杯、その娘を羽交い締めしろ！」と、かずみに指示した。

かずみは目を思い切りつぶり、その光景を見たくなかった。

その時、レイプされかけた時のフラッシュバックが起き、かずみは急いでトイレに行き、嘔吐した。

男性は「やるすぎたかな」とつぶやき、

「では、その娘を抱いて慰めて欲しいのだ。まず初めに口づけを」と言われて、かずみは、その娘へ顔を近づけたら、いきなり、その女性からビンタを食らわされた。

かずみは本能的に「この子はレズではない。レズプレイを強要されているだけなんだ」と感じ取った。

かずみは、男性のお客に怒鳴りつけたい気持ちを抑え、丁寧な口調で言った。

「お客さん、これはやり過ぎではないですか？あの子、レズではないし、それを強要されても、私としてはあまり気持ち良いものではありませんから」と言ったら、

その男性は「この子は真性マゾなんだ。だから、いじめが酷ければ酷いほど快感に感じるのだ。ぼくが君を指名し、君はこの時間にこの子を慰めて欲しいのだよ」と丁寧の説明した。

「では、このこと一緒にお風呂に入ります」とかずみは言い、その娘のメイド服を脱衣所で脱がせ、かずみも服を脱いだ。そのマゾの娘は、恥ずかしそうな顔をした。

お風呂場では都合良くお湯が入っており、かずみは「そんなに恥ずかしがらなくても良いのだよ」と言って、そのマゾの娘は、かずみに背中とお尻を向けながらお風呂に入った。

お風呂場は照明が明るかったので、背中に鞭が打たれた跡がたくさんあり、それを見て、かずみは、その男性のお客に強い憤りを感じた。「なんて、酷い人なの」と言ったとき「なぜ、あなたがそんなことを言う資格があるのですか！私の御主人様を非難しないで！」とキツイ口調で言われた。

かずみは、こんなに酷い目にあっても、御主人様を慕うとは、SMは奥が深いと感じた。

ふたりはお風呂に入り、しばらく黙っていた。かずみと、そのマゾの娘とはお互いに背中を向けたままだった。そして、長時間、お風呂に入ったままだと、のぼせてしまうから、二人はお風呂からでた。

男性のお客は、「ふたりとも全裸でこちらへ来るように」と言われ、かずみは異性視線があるので、そのマゾの娘の後ろ側にいて、自分の身体を隠した。そのマゾの娘は「そんなに恥ずかしがること無いわよ」と同じことを言われた。

かずみは、そのマゾの娘に肌がくっつきそうになると「離れて！」と言われた。

そしてベットの中で、二人とも全裸になって横になった。そのとき男性は「さっきの口づけをしてくれないか」そしてマゾの娘に言った「この子と口づけをしなかったら、もう二度とお前とはプレイしないぞ。わかったか」と厳しい口調で言った。かずみは相手が嫌々、口づけする女性では、あまり気持ち良いモノではなかった。

男性の客が言ったように、口づけをした。あまり気持ち良く感じない。むしろ罪悪感さえ感じる。

『わたしはオナナ同士の口づけは、とても楽しいし気持ち良いけれど、レズではない子と口づけをしても何とも感じないわ』と思った。

そして、口づけをしたときマゾの娘は涙を流した。

それを見た、かずみは男性のお客に対して強い嫌悪感を感じ、そして感情を抑えて「相手が嫌がることを強要するのは、もうSMではないのですか」と言った。

その男性もドSだが、鬼ではない。「もういい。これでやめよう。ぼくがやり過ぎたから」と、意外と素直に、かずみの言葉に従った。

性風俗の世界に身を投じる、かずみは、ますます風俗業界の厳しさを痛感した。

もう、やめようかな？性風俗業界を

かずみは、前回のカップルのお客の件により、人間の性欲は多様であるが、SMはとても苦手である。

性風俗で稼ぐのをあきらめるのは、200年後の未来に行くことをあきらめるのと等しいのである。

まして会社に内緒でやっていることだし、それ自体が違法行為なのである。

会社の社員規定では、無断でアルバイトをしてはいけないという規定がある。

それを破ったことが知れたら、最悪の場合、解雇される。

OLの仕事も、正社員だし福利厚生も充実しているし、もし今勤めている会社を辞めて、性風俗業に専念するほど度胸はない。AVでビアン系の女優をする度胸もないし、もし会社にばれたら、そう考えるだけで「わたしって、弱虫」と自分を責めてしまうのである。かずみは、まるで弱気な少年そのものだった。服装をパンツにブラウスだけにすると、まるで、かわいらしい少年みたい。鏡を見ると、自分に対する劣等感が強くなるだけである。

「唯一、救いなのはスタイルが良いだけ。顔も女ばくないし、まるでロン毛の少年みたい。こんな私だから、お客さんからの指命がないのかわ」と気が落ち込み、次の土日は、お店を休むことにした。

ついでに金曜日も休んで、木曜日の夜は、お酒を飲んで気分転換しようと考えた。

「美味しいつまみとカクテルをいただいて、気持ち良くなったところで寝る。お昼まで寝て、そして電車で宛のない旅をして気分転換しよう」と考えた。「もし、わたしが男の子に産まれたら、合法的に女の子と恋愛して、女の子とエッチな子とし放題なんだから、男に生まれた方が良かったかも」とつぶやいた。

かずみは、とてもボーイッシュだから活発で気が強いと思われがちだが、実際は気が弱く内気である。

木曜日の夜、スナックにいきカラオケを歌って、日頃のストレスを発散し、自分が風俗業で働いていることを知らない人に話し、その業界での苦労はなしをして、普段言えないことを言って気持ちがスツキリした。そして、明日の朝は、電車に乗って遠くに行こうと思ったが、いつもの癖で、ビアン系のDVDを観て、何度も長時間才二ーしたら、いつのまにか朝になってしまった。

少し仮眠したつもりが、夕方になってしまった。

「せっかくの平日なのに、寝て一日を無駄にしてしまった。こんな私を誰か抱いて欲しい」と思い、逆に自分がビアン系のお客になれば、勉強になると思い、今からネットで検索して、ビアン系デリヘリの予約を取りに行こうとしたが、どこも予約で一杯だった。そのとき「だれでも良いから私のことを抱きしめてくれる女の人がいなにか」と思った。

結局、普段、少食のかずみは、一人で食べ放題に行き、お腹一杯食べて気持ち悪くなり、夜おそくスナックに行きお酒を飲みに行った。

愚痴を言ってもスッキリできても、自分の悩みを相談する人は誰もいないという孤独感を感じた。

ネットで、何軒かのピアノ系風俗店に予約して、日曜日の夕方にやっと、予約が取れたが・・・。

かずみ、性風俗店のお客になる

かずみは、初めて性風俗店のお客なる。ネットでは顔をぼかしているの、実際にあってみないと、本当の顔がわからないのである。

かずみは、指名したビアン系性風俗嬢と、某ラブホテルで会つと、イメージしていたよりも容姿が劣っていた。むしろ内心、自分の方が、まだ女らしくかわいいと思っていた。そのビアン系風俗嬢は、かずみと違い、ちよつとふくよかであり、お腹が二段腹であり、脚が太い。

「なぜ、あんな子が性風俗の仕事が続けられるの？」と不思議に思つた。

こんな質問をすると失礼だと思うが、質問した「すみませんが、あなたは何年、この業界で仕事をしているのですか」

「約3年以上はつづいている」

「ビアン系の仕事して辛いこと、やめたくなることないのですか？」

「わたし割り切っているから、何とも思わないわ」

その性風俗嬢は、かずみのスタイルの良さに感銘して「あなたキャンギャルやレースクイーンが似合うわ。もしかしてその仕事をしているの？」

「いや私は、ただのOLです」

かずみは、もしかしたら相談に乗ってくれると思って、

「実は、私、会社に内緒で、ビアン系の仕事をしているの」

そしてもう一言付け加えた「わたしって、良く男の子と間違えられるの。それに胸がないし」

その性風俗嬢は「容姿が良い悪いの問題ではなく、根性があるか無いかの問題ではないの」と答えた。

「わたしも性格が悪いお客に当たることがあるが、仕事だと思って割り切るわ」

「では、何があっても驚かないの」

「もう慣れっこ。何があっても驚かなくなった。どんな仕事でも嫌なことはつきものなのよ。あんたのOLの仕事も嫌なことがあるでしょう」と言った。

「私って、お客さんから全然、指名されないし、もう辞めようと思うけど」

「もう少し頑張って見れば」と励まされた。

そして、タチのかずみは、今回はネコ（受け身）になり、かずみは抱かれた。

他のビアン系のお店に行くのも勉強になるわと思った。

ノーパンは気持ちいい

かずみの休日の服装は、ショートパンツにタンクトップの服装で一年を過ごすのである。ある意味では露出症である。

土日にお店に行くときは、マイクロミニスカートかホットパンツのどちらかを穿いてくるのである。

マイクロミニスカートだと階段やエスカレーターを使うとき、後ろからパンツが見えるので隠すことがある。だから、隠す必要がないショートパンツやホットパンツのほうが気を使わないですむのである。

ホットパンツだと、下着のパンツを穿くとなぜかわずらわしさを感じるので、ノーパンである。

「ノーパンでホットパンツを穿くと、あのゴワゴワした感触がいいのね」というので、次第にノーパンでホットパンツを穿く機会が増えるのである。風俗店の同僚は、その事を知って「かずみったら、ノーパンだとお尻がたれるわよ」といわれグツさと来た。

「ノーパンでホットパンツを穿くと気持ち良いのに」と、かずみはつぶやいた。

ときどき店の、おとなしそうな女の子に突然抱きついたり、胸や太ももを触ったりする。

店長は、かずみの待機態度が悪いので自宅待機を命ずるようになった。それが、かずみにとって心理的にグツサとくるのである。「わたしは、どうせ指名されることが少ないから、ネットで予約された

ときだけお店に来るだけなのね」と気が落ち込んだ。

次の土日は、ビアン系DVDを見ているとき、ホットパンツの下には何も穿かず、電動マッサージ機を使って、オニーをした。「癖になりそう。だけど女の人の肌が恋しい」とつぶやきながら、激しいオニーをしているのである。

「気持ちよすぎて気が変になりそう」と思いながら、土日はお店から連絡が来るのを待っていた。

夕方、数時間に及ぶオニーが終わると、ホットパンツは液で汚れた。お店から何の連絡もなかった。かずみは、これはやりすぎだと思って、パジャマに着替え、テレビ番組を見た。

鏡をみて少年みたいな顔だと思い「今日は誰からも指名がなかったわ。もっと髪の毛を伸ばしてイメチェンしなければ」と思った。

数週間後、髪の毛が長くなって

かずみは、髪の毛を伸ばした。

会社の同僚から「何か心境の変化があったの」とか「でも、短いほうが、かずみぽい」「以前の髪型のほうが良かった」といわれたが、何が何でもイメチェンしたかった。

かずみはフェミニンな女性になりたいと思った。

だが、顔はどうしても少年のような顔なので、はじめに、眉毛を細くして、いかにも女らしい顔にしようとした。それ以来、かずみは化粧も濃くなり、旗から見れば「昔のかずみのほうが良かった」という声が多かった。

服装も普段着はマイクロミニスカートでなく、ひざまでの長さのスカートにした。

お店で写真を取り直し、それをぼかしてお店のホームページに載せた。

だが、以前よりも、指名がなくなり、むしろ、かずみが髪の毛を伸ばしたのは、逆効果であった。

店長は「かずみちゃんは、おばさんたちからみるとかわいい少年みたいで、ボーイッシュだから見ていただけで元気になる雰囲気があるし。だからデートコースの指名があったのね。もとのかずみちゃんになったほうが良いわ。最近は全然、指名がなくなったから」と言った。

美容院に行き、髪の毛をばつさり切って欲しいとお願いし、耳がでるほど短くなったので、しばらく男の子のような、かずみになってしまい、当然、しばらく土日にはお店に行くことはできなくなった。通勤のとき、パンツはいて女性専用車両に乗ると、背が高く少年のような顔しているから、ほかの会社のOLからは、「なんなの！男の子がのっている！」と思われることがよくある。

なかなか性風俗で成功するのは、難しいと思った。

性風俗の仕事をして、以前よりも出費が増えたことに気がついた。

「これでは、自分の身体を冷凍保存させて200年後の未来に行くことは、ますます難しくなった」と、かずみは、つぶやいた。

穢れすぎたオンナ かずみ

かずみは一年、365日、余程体調が悪い時以外は、一日も休まずオニをするし、それも一日に2度、3度は当たり前である。

かずみ自身は、同性愛者でありビアン系のDVDを観てばかりいるから、ほとんどテレビ番組をみないから、世の中の動きが良く把握できないため、OLの同僚と話しが合わないことが多い。

その上、真冬でもミニスカートで生足で外出するから、異性の視線が脚に集まることが多々ある。
ジロジロみられると恥ずかしいが、いつでもエッチなことができる体制である。

だが、外見と裏腹に、男が大嫌いであるから、電車で痴漢に遭うと怒鳴り声をあげて「やめてくださいッ!!!」と叫ぶことがある。
女性ならどこを触れても平気だが、男性が触るなら、怒鳴り声を上げるのである。

かずみも25歳であり、次第におばさん化するのを内心おそれている。

さらに年齢が加算すると体内の代謝が悪くなり肥満になりがちになるから、必要以上に食べないのである。だから、毎日、体重計に乗って自分の体重を気にしているし、とくにウエストを測ることが多い。

せっかく風俗嬢になったのに、ほとんどが、おばさん相手で、それもデートコースで、女性との肉体関係を持つことはほとんどない。
だから、よけいにオンナの肌が恋しくなる。

だから、性風俗の仕事をしてから、以前よりも出費が増えた。
とても性風俗は儲かる仕事ではない。

パソコンでオニーのネタを探したとき、ビアン系出会い系サイトを見つけ、いつでも捨てられるWebメールを作り、ビアン系出会い系サイトに登録した。あまり期待していない。どうせ、世の中、思うどおりに行くほうが気持ち悪い。思い通りに行かないのが当たり前だと思っていた。

その時、すぐに20代のビ안의女性からメールが来た。

「どうせサクラでしょう」と思い、自分のハンドルネームを「かずみちゃん」とした。

サクラだと、コンピュータ処理なので、「かずみちゃんさん」という不自然なメールが来るが、「はじめまして。かずみちゃんへ」というメールが来たので、これは本物かと思った。

もしかしたらオナナ同士でエッチなことができると思って、それを想像しただけで、ムラムラしてきて、パンツに手を入れてオニーをした。そのとき、かずみはパンツ一枚でパソコンを使っていた。

ちよつとしたことで、頻繁にオニーをするので、とても清い女性から、ほど遠く、自分は穢れきった女性だと思った。

でも、相手の顔がわからないし、もしかして、これもサクラかも知れないと思い、返事のメールを出したら、すぐに返事が戻って来た。

相手も、今すぐにでも、オナナのカラダを求めているのがわかり、都内某所のラブホテルの入り口で待ち合わせることにした。

出会い系 悲劇の始まり

かずみは、黒に近い灰色のロングスカートを新着した。ウエストのところが少し重く感じた。

寒いので肌色のストッキングを履いた。黒っぽいジャンパーを着た。日頃の、かずみの服装としては、とても地味だった。寒いだけではなく、ラブホテルが乱立している場所だと変な男から声をかけられる恐れがあり、なるべく地味な恰好をした。

「喫茶店とか駅の改札口にすれば良かった」と思った。

時間どおりに、相手の女性が来た。

「ごめんね。ちょっと遅れてすみません。これからよろしくお願いします」と丁寧に挨拶した。

気になるのは大きめのバックだったが、かずみは気にしなかった。

お互いに詮索しないように気を遣った。

ラブホテルの部屋にはいるとき、どの部屋がいいのか選び、そして料金を払い鍵を借りて、部屋に入った。

だれも見えないので気を使わないですむ。

だが、気になるのは大きなバック。かずみは、夜食なのか着替えの服が入っていると思った。

「はじめまして。御主人様」と言われ、かずみは驚いた。

相手の女性は、すわり土下座して「御主人様。私を存分、虐めてください」とお願いした。

かずみはSMが苦手である。

困惑し、何をしたらいいのかわからなくなった。

「わたし、あなたのカラダの縛り方がわからないわ。いきなりSMなんて・・・」

「では、この私を鞭で打ってください」

「そんなこと言われても」

その出会い系であつた女性は自分で服を脱ぎ、黒いボンデージの服に着替え、壁に手をつけて、かずみに背中とお尻を向けた。

「さあ、御主人様、私をぞんぶんいたぶってください」と言つたとき、かずみは「ちょっと、話し合いましょ！」と言つた。

だが「話し合う前に、鞭をせめて10回だけやってください」と言われ

かずみは、その女性のお尻を軽く鞭で打った。

「御主人様、もっと強く」

かずみは思い切り、その女性のお尻に鞭を打った。

「で、10回くらい鞭を打ったわ。ちょっと話し合って欲しいけど」

二人はソファーに座り、相手の女性は女王様を求めているのである子とを知った。

「なんか美味しい話したと思ったら、そんなことなんだ」と思った。

お互いに詮索しないということにしているが、なぜ相手の女性がSMに目覚めたのか、それを聞こうとする前に、その相手から話し出した。

「わたしは中学生の時に、学校の裏で人目が見つからないところで、何人かの男性にレプされたの。そのままほっと置けば、子どもも産めるけど堕ろしたの。でも、やられたときの、とても乱暴され怪我して痛かったけど、とくに初めに挿入されたとき血がでて、お腹の中がカッターでスッパと切られたような感じだった。それくらい、男の御主人様の奴隷を経験したけど、やはりオナナのことはオナナが一番知っているから、オナナからイジメらたくなっただの」と話した。

「心の傷はなかったの？」

「それが、子どもを堕ろしてからも、何度もレプされてつづけたの。気がついたら、もう子どもが産めないカラダになっていたけど、痛いことが快感になって」と話した。

かずみはレ プ未遂で、心に大きな傷をいまだに解消されていない。
だから男が嫌いである。

その一線を越えると・・・。

共通しているのは、見知らぬ男性からやられると、アブノーマルな
性欲になることだということ。

性犯罪に巻き込まれる女性の場合、心に大きな傷を抱き、場合によ
り、精神的にかなり不安定になり、性的なことを強く嫌悪するか、
性欲に溺れるかのどちらかである。

心の傷は、どうしたら癒されるの？

かずみは、出会い系で出会った女の子が、「私は子どもが産めない身体にさせられた」という言葉にショックを受けた。

かずみは、同性愛者であり、一生結婚するつもりはない。そもそも、男性と結婚して子どもを作るなんて、想像できないのである。

でも女性として、もう「子どもが産めない身体させられた」というのは、「何度も中絶をさせられたから、いつのまにか子どもが産めない身体になった」ということだった。

要するに、集団で何度もレプされ続けても、警察に訴えられない。訴えると仕返しが怖いから。

かずみは、その話を聞いて震えた。

もう、オナナ同士でエッチなことをする気になれず、出会い系で出会った女の子の身の上を聞くだけであつた。なぜ、心の傷がないのか聞いた。

かずみは、出会い系の女の子の話を最後まで聞きつづけた。

あまりにもおぞましい話しなので、今夜は、何もエッチなこともせず。一晩泊まらず、短時間で、その女の子と別れることにした。

あまりにもショッキングな話だったので、帰りにスナックによってお酒を飲む気にもなれず、毎晩行っオニーも、ピアン系DVDを観る気になれなかった。

世の中、あまりにも想定外なことが多い。

悪い夢だと思い、少しでも早く寝ようとして、ちょっとだけワインを飲み、そのまま寝てしまった。

本来なら、オンナ同士で一晩中、エッチなことをしようと思ったが、かずみにとて、レプの末、子どもが産めなくなった身体にされた話を聞いて、ショックだった。

出会い系で、女の子みたいな『男の娘』と会おう

かずみは、マゾの女性とは二度と会うことはないと思ったが、また出会い系の掲示板に、かずみ宛のレスがあった。メールアドレスがあり、メールしたら、女の子とやりたいというから、こんどこそ、外れが無いと思った。

そして金曜日の夕方、その、かわいらしい子と会い、ラブホテルへ直行した。

出会い系の子は、身長が165センチで、かずみより少し背が低かった。かずみの身長は170センチであるから、女性としては背が高い。

むしろ、かずみの方が男性みたいに見える。今度は長ズボンに紺色のジャケットを着た。

だから、他の人たちから見ると男女のカップルのように見えるのである。

相手の子は、髪の毛が肩まで伸びており、かわいらしい女の子らしい服装をしているので、かずみは、こんどこそ、オナナ同士でエッチなことができるかと期待していた。

ラブホテルに入り、部屋の中に入ると、その子の声は、かずみみたいに女性としては声が低いので、そのことはあまり気にしなかった。

そして、二人は服を脱ぐと、その出会い系の子には、男の象徴あることに気がつき、かずみは、憤りを感じた。

「あんだ。私を騙したわね！」

かずみは怖い顔をした。その、男の娘をにらみつけた。

その男の子は裸で、おびえながら、泣き出した。

かずみも気が弱い女の子だから、もう怒るのは、やめて、話を聞くことにした。

そして二人とも服を着て、ソファーにすわってテーブル越しで話し合った。

「もう、泣くのを止めて。あなた男性でしょ。どうして、人を騙すことをするの？」

その時、その女の子みたいな男の娘は、強い口調で「僕の肉体は確かに男性だが、心は女なんだ」ときっぱり言った。

『たしかビアン系風俗店でも、性同一性障害者のサービスがあるわ。肉体が男性でも、心は女性の人もいるわ』と考えた。

その男性は、確かに肩幅が狭く痩せている。脚も細い。体毛も少ない。その上、全身の体毛を処理している。むしろ、かずみの方が男性的である。

男性なのにウエストにくびれがある。バストが無く、男の象徴があ

るところに以外、まるで、かわいらしい女の子みたいだった。顔もかわいい女の子みたいであり、かずみの方が少年らしい顔をしている。

「だまして、ごめんなさい」と泣くから、かずみは、なぜか、その男の娘が、とてもかわいい女の子みたいにみえるので抱いた。本物の女性よりも、かわいいからである。かずみは不思議な気持ちになった。『今、抱いているのは男性。拒絶反応はない。何故だろう？』と不思議な気持ちになった。

でも、レスプレイをする意欲はなかった。

かずみにとって、例の男性の象徴が気になってしかたなかった。

かずみは、せっかくだから、ラブホテルにあるカラオケを使って、ふたりでカラオケを歌って、盛り上がった。そして冷蔵庫にあるビールを飲み、たのしい時間を過ごした。

今回も全然エッチなことをせず、ラブホテルから出た。

「今日は、たのしい、ひとときを、ありがとうございました」と礼儀良く挨拶して、その男の娘は、かずみから去って行った。

かずみは、今回だけは、なぜか拒絶反応を出さなかった。そして帰りにスナックに寄り、お酒を飲み、タクシーで帰った。

2泊3日 SMの旅 その1

かずみは、ビアン系性風俗店に勤めている女王様みたいな先輩と、まだ18歳、高校卒業したての後輩との田舎への旅行に3人で出かけた。

18歳の後輩は、マゾのビアンであり、同性から性的虐待を受けると快感に感じるのである。

後部座席に、かずみと18歳の後輩が乗り、女王様みたいな先輩がクルマを運転した。

「ねえ、目的地まで休み無く自分の手でオニーしなさい」と18歳の後輩に命令した。

エンジンがかかり、ミニスカートの中に手を入れ、18歳の女の子は、休み無くオニーをつづけた。

ちよつとでも手を休めれば、先輩の女王様から強い口調で叱責をうける。

そしてわざと、人目がつくように、わざと渋滞している道路にクルマを移動させる。後部座席がまる見えなのである。

かずみも、左隣の女の子がオニーしているのを見て、性的な興奮した。

理性を失い自分もやりたくなったとき「先輩、私もしても良いですか？」と訪ねたら

「でも、いま道路が渋滞しているし、みんなの目があるから、空いてからの楽しみで良いじゃないの」と言われた。

たしかに渋滞してクルマがゆっくり移動しているから、歩道からの人目があり、かずみはオニをするのを我慢した。かずみは人にオニを見せるのは恥ずかしいモノがある。だが、18歳の後輩の女の子は、みられると逆に興奮するタイプであるから人に見せられても平気だった。

18歳の後輩の女の子の服装は、だんだん乱れだし、ブラが外れ、左手で自分の胸を揉みだした。白のブラウスは前にボタンがついていて、まるで女子高生が着る制服みたいだった。

女王様みたいな先輩は、後輩の女の子が、目的地の旅館に到着まで手を休めるのを許そうとはしなかった。

18歳の女の子は「手がしびれてきました。お願いだからバブで勘弁して」と言った。

かずみは「このままだと腱鞘炎になるから、この辺で勘弁したら」と先輩に言った。

先輩「かずみちゃんがいうから、この辺で勘弁するわ。でも到着したら、その分、厳しくお仕置きするから覚悟しなさい」と言って、18歳の女の子は、手を休めた。

その時、かずみは、18歳の女の子の太もをさすった。後輩の女の子から「ああんっ・・・」と小さな声が出た。

「流石、10代の女の子の肌はすべすべしている。ふとももが柔らかい」

かずみは明るい口調で、かわいこちゃん口調で、後輩の女の子に「旅館に到着したら、私と一緒に風呂に、は・い・り・ま・しよつ」と言った。

2泊3日 SMの旅 その2

かずみは、18歳の女の子の後輩を「えものちゃん」と呼び、「えものちゃん。私と一緒に口づけしましょう」と後輩の女の子と口づけをした。

かずみは、久しぶりにオナ同士でエッチな事ができる喜びを感じた。

その時、クルマの速度は速くなり、人目がつかない山道を走った。

かずみは性欲のままに、後輩の女の子に対して、さまざまなエッチなことをした。

後輩の女の子は、クルマという密室の中で、かずみの性欲の『獲物』そのものとなった。

かずみは、この時間が永遠につづくことを望んだ。

「久しぶりに、女の子とエッチなことができる。私オナに産まれて良かった」と喜んだ。

女王様みたいな先輩は、「もう少しで目的地に到着よ」と言い、そして後部座席に座ってる二人は、服装の乱れを整えた。

クルマの中は、女性がエッチな事をしたことで、オナ臭さがあつた。

そして、目的地に到着したら、外の空気が、おいしく感じた。

「えものちゃん。これから、私たち二人でお風呂に入ろう」と、か

ずみは明るい口調で、後輩の女の子に言った。

クルマのトランクを開け、荷物を持つとき、18歳の後輩の女の子は、かずみと女王様の先輩の荷物を持った。

かずみ「いいのよ。えものちゃん。自分の荷物は自分でもつから」

「先輩、遠慮しないで、ドシドシわたしに要件を言いつけてください。そして、わたしに日頃のストレスをぶつけてください」と丁寧にお辞儀した。女王様みたいな先輩は、この後輩にメイド服を着せれば良かったと思った。今回は女子高生みたいな服装だった。

女王様みたいな先輩は「彼女の自由にさせたら。この娘、人に奉仕するのが好きだから」

で、かずみは、後輩の女の子の境遇は聞こうとしなかった。前回、出会い系でラブホテルで出会った時、頻繁にレプされたすえに子どもが産めない身体にまでさせられたという話を聞くと、恐ろしさを思い出してしまふからである。

かずみは「えものちゃん」と名付けた女の子が、何故、ピアノ系でマゾになった理由は一切きかない事にした。

身長が低い女の子が、重い荷物を持つが、ここはほとんど人目がない寂れた旅館だった。身長が高い女性が二人は、何も持たずに旅館に入った。

女王様の先輩は、後輩の女の子に「ねえ、私たちの荷物を丁寧に運びなさい」

「ほら、荷物が落ちそうでしょう。ちゃんと私たちのカバンを握りなさい」と口うるさく注意したが、後輩の女の子は喜んだ表情をしていた。

旅館の中は、プライバシーが保たれ、女性3人は二階の客室へ行った。

旅館の女将さんが案内した。「こちらでございます。お食事は何時頃がよろしいでしょうか？」

女王様みたいな先輩「午後7時半くらいが良いわ。その時間をお願いします」と言った。

女王様みたいな先輩はデジカメを持ってきた。ほとんどお客が来ない旅館だから隣の部屋は誰も来ない。旅館も昭和30年代に建造された、いかにも歴史が刻まれた雰囲気があり、レトロな環境である。

女王様「ねえ。隣は誰もいないね」

かずみは、ちよつと部屋の外を出て、様子みて誰もいない雰囲気だったので「誰もいないです」と答えた。今はシーズンオフで平日。お客は私たちのみ。

女王様「では、これから、かずみちゃんが名付けた『えものちゃん』の調教を始めましょう」

かずみはSMは苦手である。

「先輩、私、S Mが苦手なんです。なるべくならソフトなS Mで」と、かずみはお願いした。

そして、『えものちゃん』と名付けられた後輩の女の子は、デジカメで白いパンツ一つだけの姿を十数枚もの写真を撮影した。かずみは「わたしよりも胸が大きいっ」と女子高生みたいな声で言った。

「だから胸が柔らかくて気持ち良いわけだわ」

そして、デジカメで女王様みたいな先輩は、後輩の女の子のヌード写真を何枚か撮影した画像を見せて言った。

「ねえ。これをネットではらまかたくなかったら、私たちの言うことに服従しなさい」と言われ

「服従します。好きなだけいたぶってください」と言った。

「今回は、かずみちゃんがいるから、ハードな責めはしない。だから鞭打ちをしない」

その『えものちゃん』と名付けられた後輩は、物足りなさそうな表情をした。

確かに、かずみは、S Mは苦手である。まして前回のようには壮絶な体験、子供が産めなくなるまで辱められた女性が、マゾだったという話を思い出したくないからである。

かずみは、これから服を脱ぎ、旅館の浴衣に着替えようとしたとき、後輩の女の子は、パンツ一っだけの姿で、かずみに「先輩の着替えは、私がします」と言い、かずみの服を脱がせた。

かずみの下着のブラを外したとき、かずみは、後輩の女の子に抱きついた。

「先輩、もっと、きつく抱いてください」蛍光灯に光に照らされた10代の女の子の肌は、ピカピカに反射している。なめらかさを感じさせる肌である。きれいな肌色をしている。腰にはくびれがあり、太ももは長く細い。かずみにとって、それが性的強い刺激になり、性的に強く興奮した。

かずみ「肌がすべすべしていて気持ち良いわ。それに抱き心地も良いし」

二人の女の肌が密着した。

そしてオナナ同士でエッチな事をした。

あまり、よけいな事を聞かないために、かずみは後輩の女の子と激しい口づけをした。

その時、先輩は「この辺でやめましょう。かずみちゃん」と言われ、後輩の女の子から旅館の浴衣を着せてもらった。

そしてパンツ一っだけの後輩の女の子は、女王様みたいな先輩からきつく緊縛されたい。だが、かずみの目があるので、緊縛をするのを止めた。後輩の女の子に手錠と足かせをつけて、パンツひとつだけで、しばらく放置させた。午後4時のことである。

2泊3日 SMの旅 その3 先輩との対話

午後4時に、かずみと女王様みたいな先輩は、旅館のお風呂場に行った。

旅館の脱衣所で浴衣を脱ぎ、そして二人は全裸になった。

かずみ「わたし、胸が全然無いの。だからオンナとして魅力がないし」

先輩「かずみちゃん。もつと自分に自信を持ったら良いよ。かずみちゃんは脚がとても長いし、スタイルも良いし、顔の表情が優しうだから」と優しい口調で答えた。

かずみ「そうかな。でもお客が、ほとんど来ないし」

そのままお風呂に入った。広いお風呂場には、かずみと先輩の二人しかない。

先輩「かずみちゃん。SMがなぜ苦手なの」

かずみ「実は、私、中学二年の時にレ プされかけたことがあって、それ以来、男が怖くなり・・・。

それに、たていの男の人はSMが好きでしょう。サドは乱暴で、マゾは気持ち悪いし。やさしそうな顔をした男ほど、怖いものないわ」

先輩「でも、もう10年以上前の事件だったでしょう」

かずみ「顔殴られ、脚は傷だらけになった。もう思い出たくない」

先輩「いやな事、思い出させてしまつてごめんね」

かずみ「先輩、気にしないでいいですよ。そのお陰で、私オナナに生まれて良かったと思うから」

先輩「でも、この世の中には、もっと心の傷をおっている女の子がいて、自分で自分の身体をナイフで傷つける子がいるのよ」

かずみ「そんな子がいるのですか？自分で自分の身体を傷つける子が・・・」

先輩「そうよ。だから、あの、えものちゃんなんか、まだ良い方だね。で、これから、今の仕事を続けるのでしょう」と優しい口調で訪ねた。

さらに「でも、かずみちゃんは、まだ、努力が足りないわ。ネットでもっと自分をアピールしなければ。ブログをお店のホームページにリンクするとか、それに、かずみちゃんの顔は、やさしそうだから、顔をハッキリだすのもありだし」

かずみ「顔はハッキリだすのは、今できない。私、OLの仕事しているし、それも正社員だし」

先輩「でも、かずみちゃんだけ、土日、のみ出勤で、平日は完全オフなんだけど、それだとあまりお客がつかないし」

そう厳しいことを言われて、かずみは考え込んだ。

そして、お風呂からでて身体を洗い、またお風呂に入った。

先輩「かずみちゃんは、なぜ、この仕事を選んだの？それも会社に内緒で」

その質問をされて、一瞬、考えた。正直な事は言えば笑われる。

かずみ「実は、わたしって、オナナに対して、とても淫乱なの？毎晩のようにビアン系のDVDを観てオニーしないと生きていけない。同性愛が禁じられたら死んだ方がまだマシ！どんなに美味しい食事よりもオナナが好きなの。だから私は、この仕事を選んだの」

先輩「それだけ好きなら、OLやめて、この仕事に没頭してもいいじゃないの」と、また厳しい一言がきた。

かずみは、それを言われて、自分の考えが甘いと思ったのは、5年間、一緒に暮らしたアンドロイド199Jpと再び合うために、200年後の世界に行くためお金を貯めることなんだと考えた。はじめは風俗の仕事は、儲かると思ったが、実際は、以前よりも出費が増えた。貯金も徐々に減ってきた。むしろお金ためるところではない。

風俗の世界で儲けるには男性を相手にした仕事をするしかない。それもキャバ嬢とかSMの女王とか。

で、逆に先輩に質問した。

「先輩は、なぜ、このビアン系の仕事をするようになったのですか

「？」

「それは、かずみちゃんと同じ、オンナが大好きだから。ただそれだけ。ビアン系の仕事はたいして儲からないし。儲けるには努力するしかない」と答えた。

二人はお風呂から出て、旅館の浴衣に着て、冷たいものを飲んで、ソファで二人はゆっくり話し合った。

で、後輩の、えものちゃんは、二時間ほど手と足に手錠されたまま放置プレイされた。

2泊3日 SMの旅 その4

かずみと先輩がお風呂から出て、後輩の女の子の、えものちゃんが2時間も放置されたままであった。

えもの「おねがい。手錠をほどいて。このままだと漏らしてしまいそう」

かずみは「先輩、えものちゃんの手錠をほどいたら。トイレいきたいから」

先輩は、かずみの言葉を聞かないふりして、持ってきた雑誌を読んだ。

えもの「かずみ先輩、私を抱いてください」

先輩は、かずみが抱こうとしたら、かずみに話しかけた。

そして、その廊下で、かずみに注意した。「ねえ、えものちゃんは今、放置プレイの最中なの。あと1時間ほど放置させてから、トイレにいかせるわ」

「でも、もし本当にお漏らししたら旅館の女将さんから何と説明したらいいの？」

先輩は考えた。

「ちょっと話し合いましょ」と言って、元のソファがある場所に行き、30分だけ話し合った。

時計が午後6時半を示したとき、もとの部屋に戻った。

えものちゃんと呼ばれる後輩の女の子は、ほんとうに我慢した。

えものちゃんの腕は後ろ手にある手錠と足かせをほどいた。

手錠と言っても布製のものであり、ベルトと同じ構造をしている。

で、先輩のサディストさがでてきた。浴衣を着たいなら、先にパンツ一つのかっこうのままトイレに行きなさいと命令した。若い女性がパンツ一つで廊下をでて、トイレまで行く。

小さな旅館なので、トイレは廊下の突き当たりにある。

他にお客さんはいないが、女将さんや旅館の社員と会うかもしれない。

でも、先輩の命令は絶対服従である。トップレスの状態で廊下をおそるおそる歩きながらトイレに行った。

えものちゃんと名付けられた後輩の女の子は、両腕で胸を隠すような恰好で、元の部屋に戻った。

もし旅館の職員から、自分がパンツ一つだけで廊下を歩いたのを見られたらどうしようかと考えながら、廊下を歩くと、強い緊張感があり、それだけで興奮してしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0757z/>

かずみ・2200年の未来へ行く

2011年12月21日19時51分発行